

## 中国の少数民族区域で再生可能エネルギーの導入が進展<sup>1</sup>

新エネルギー・国際協力支援ユニット

新エネルギーグループ

中国には5つの自治区（新疆ウイグル、チベット、内モンゴル、寧夏回族、広西チワン）のほか、多数の自治州・自治県によって構成される広大な少数民族区域が存在する。主に山岳地帯や砂漠地帯に位置し、太陽光や風力の資源に恵まれたこれらの地域では近年、再生可能エネルギーによる発電施設が相次いで建設されている。

今年11月、中国のチベット自治区で初の風力発電所が送電線に接続した<sup>2</sup>。中国 Longyuan Power 社が開発し、チベット自治区ナクチュ（Naqu）県に建設された施設は標高4,900メートルに位置し、風力発電所としては世界で最も高い場所にあるとされる。

また、新疆ウイグル自治区では今年6月以来、1GWの風力発電容量を新規導入し、11月に風力の累計設備容量が4GWに達した。国家电网公司（State Grid Corporation of China）は新疆から他の大電力消費地へ風力発電電力を送るために、同区の送電網整備に毎年5億人民元（8,200万ドル）を投資している。同社の推定によれば、2015年までに新疆ウイグルのグリッド連系風力発電容量は9GWに達する見通しで、そのうち6GWは他の地域に送電されるという。

自治区では太陽光の導入もめざましい<sup>3</sup>。報道によれば、青海省海西モンゴル族・チベット族自治州のゴルムド市には大規模な太陽光発電産業園が建設された。2009年に着工した同園は2010年秋に第1期工事（200MW）を完了。現在45箇所、発電容量計1,083MWの太陽光発電所が稼働する1GW級の発電拠点となっている。チベット高原のツァイダム盆地に位置する同市は日射強度が高く、日照時間も長いため、太陽光発電のポテンシャルは大きい。

中国国務院は2012年10月に発表したエネルギー政策白書<sup>4</sup>の中で、少数民族自治区の

<sup>1</sup> 本稿は経済産業省委託事業「国際エネルギー使用合理化等対策事業（海外省エネ等動向調査）」の一環として、日本エネルギー経済研究所がニュースを基にして独自の視点と考察を加えた解説記事です。

<sup>2</sup> 発電容量49.5MWのうち7.5MWが系統に連系された。

<sup>3</sup> ごく最近の話題としては、青海省海南地チベット自治区 Gonghe County で、世界最大の水力・太陽光・ハイブリッドダム（Longyangxia Dam）が12月に完成した。発電容量320MWのうちPVは15MW。

<sup>4</sup> [http://japanese.beijingreview.com.cn/wxzl/txt/2012-11/02/content\\_495960\\_9.htm](http://japanese.beijingreview.com.cn/wxzl/txt/2012-11/02/content_495960_9.htm)

エネルギー政策について以下の方針を掲げている：チベット自治区、新疆ウイグル自治区、および青海、四川、雲南、甘肅の 4 省のチベット族区域の電力網の建設を加速し、電力網のカバー範囲を拡大し、電気供給の安定性を高める；チベット自治区のエネルギー発展計画を制定・実施し、「第 12 次 5 年計画」期間に 9 億人民元以上の直接資金援助を提供する；辺鄙な農業・牧畜地域に多くの太陽光発電所、風力と太陽光の相互補完発電所などの新エネルギー施設を建設し、それによって農牧民の生活の質の向上をはかる。

このように、少数民族自治区のエネルギー開発は中央政府の重点方針の一つに挙げられており、今後これらの地域における再生可能エネルギーの導入はさらに拡大すると予想される。

お問い合わせ : [report@tky.ieej.or.jp](mailto:report@tky.ieej.or.jp)